

〔臨床報告〕

本学口腔外科における過去5年間の
入院患者の臨床統計的観察

東京女子医科大学歯科口腔外科学教室 (主任 河西一秀教授)

扇	内	秀	樹	・	鈴	木	悦	雄
オギ	ウチ	ヒデ	キ	スズ	キ	エツ	オ	
中	村	嘉	夫	・	阿	部	広	幸
ナカ	ムラ	ヨシ	オ	ア	ベ	ヒロ	ユキ	

(受付 昭和49年12月10日)

1. はじめに

近年歯学教育の発展、充実はめざましく、歯科大学のみならず医科大学附属病院においても口腔外科の分野が確立されつつあり、また次第に認識を深めている。すでに口腔外科入院患者の臨床統計的観察を試みたものがいくつかあるが、特に新宿区という東京の中心に位置する本学口腔外科の診療内容を検討することは意義深いものと思われる。そこでわたくしどもが扱った昭和43年から47年までの最近5カ年間の入院患者651人の入院資料にもとづいて、臨床的観察を行なったので、その概要を報告する。

2. 対象資料および研究方法

調査対象としたものは、昭和43年1月1日より同47年12月31日までの5カ年間に、東京女子医科大学付属病院口腔外科外来を訪れた新患総数17,713名中に、入院を要した651名である。これら入院加療を要した症例を性別、年齢、入院期間、臨床診断別等に分類し観察した。なお、同一患者が数回入院した場合、各回毎に1例とした。

3. 研究成績

1) 年度別推移

入院患者総数 651例中、43年 122例18.7%、44年 135例20.7%、45年 149例22.9%、46年 121例18.6%、47年 124例19.0%であつた。45年度の149例(22.9%)が最も多く、逆に46年度の121

表1 年度別推移

年 度	合計人数	性 別	人 数	%
43	122	♂	52	42.6
		♀	70	57.4
44	135	♂	66	48.9
		♀	69	51.1
45	149	♂	78	52.3
		♀	71	47.7
46	121	♂	64	52.9
		♀	57	47.1
47	124	♂	58	46.8
		♀	66	53.2
計	651	♂	318	48.8
		♀	333	51.2

例(18.6%)が最も少なかつた。しかし各年度における頻度には大差なく、ほぼ平均しており、各年度とも130例前後の入院患者を有している(表1)。

2) 年齢および性別

年齢別では20代の169例26%が最も多く、次の

Hideki OGIUCHI, Etuo SUZUKI, Yoshio NAKAMURA, Hiroyuki ABE, Department of Oral Surgery (Chief: Prof. Isshu KAWANISHI) Tokyo Women's Medical College: A clinico-statistical analysis of inpatients in our clinic from 1964 to 1968.

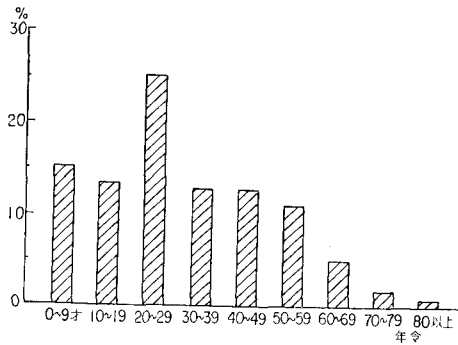


図1 年令別

で10才未満の101例15.5%で、10代78例12.5%、40代80例12.2%、50代70例10.8%、次いで60代5%、70代2.5%と次第に少なく、80代は5例0.8%で、最高年令は癌腫の84才であり、最少年令は奇形の生後2カ月であつた(図1)。

性別では、651例中男性318例48.8%、女性333例51.2%と女性の方が僅かに多かつた。各年度の性別では、43年122例で、男性52例(42.6%)、女性70例(57.4%)、44年135例のうち男性66例(48.9%)、女性69例(51.1%)、45年149例で男性78例(52.3%)、女性71例(47.7%)、46年121例で男性64例(52.9%)、女性57例(47.1%)、47年124例で男性58例(46.8%)、女性66例(53.2%)であり、男性、女性の割合はほぼ同じくらいであつた。

3) 入院期間

入院期間のうち最短の者は炎症の1日、最長のものは腫瘍の127日で、疾患別における平均入院日数は炎症15日、腫瘍29日、嚢胞13日、奇形21日、外傷32日、その他10日で、全体の平均入院日数は19日であつた。

平均入院日数を上回つたのは、外傷、腫瘍、奇形である。各疾患別に入院日数をみると最も多いのは、炎症では11~15日の71例で、1~15日間では209例中132例62.5%を示し、腫瘍では10~14日間22例が最も多く、次いで40日以上16例が多い。前者はほとんどが良性腫瘍で、後者は悪性腫瘍が大半を占めていた。嚢胞では10~14日25例で炎症と同様に20日未満がほとんどで72例(85.7

%)であつた。奇形では15~19日の19例が最も多く、外傷は40日以上が43例(40.2%)と約半数を占めている。上顎洞炎は10~14日間が41例(41.4%)であつた。後出血、唾石などのその他においては5~9日32例(37.2%)が多かつた。

4) 臨床診断別

臨床診断別に症例を分類すると表2のごとく、最も多いのが炎症の209例で32.1%、次いで外傷107例(16.4%)、嚢胞84例(12.9%)、奇形、56例

表2 臨床診断別

診断名	例数	%
変形症	5	0.7
奇形	56	8.6
嚢胞	84	12.9
外傷	107	16.4
炎症	209	32.1
良性腫瘍	39	5.9
悪性腫瘍	48	7.4
粘膜疾患	12	1.8
神経疾患	6	0.9
崩出異常	12	1.8
齦歯	18	2.8
その他	50	7.7
計	651	100.0%

(8.6%)が主なる疾患で全体の94.2%を占めていた。臨床診断別において同一患者に異種診断がなされている場合、症状の重い方を記載した。

1) 炎症

全入院患者中最も多く209例で32.1%を占めている。炎症の中で多いのが上顎洞炎99例(47.3%)で次に骨膜炎の55例(26.3%)、Dilantin性歯肉肥大16例(7.7%)、骨髄炎15例(7.2%)、蜂窩織炎10例(4.8%)等であつた。リンパ節炎5例中、結核性のものが2例あり、また特殊性炎の顎放線菌症3例がみられた。これらのうち歯性感染による急性炎症が80例(82.6%)と大部分を占めていた(表3)。

年令別にみると20代が68例(33%)と最も多く、次いで30代と40代はほぼ同数であつた(図2)。

性別では男性71名(35%)、女性138名(65%)

表3 炎症

診断名	例数	%
歯性上顎洞炎	99	47.3
顎骨骨膜炎	55	26.3
顎骨骨髓炎	15	7.2
蜂窩織炎	10	4.8
耳下腺炎	4	1.9
放線菌症	3	1.4
歯肉肥大	16	7.7
リンパ腺炎	5	2.4
唾液腺炎	1	0.5
扁桃炎	1	0.5
計	209	100.0

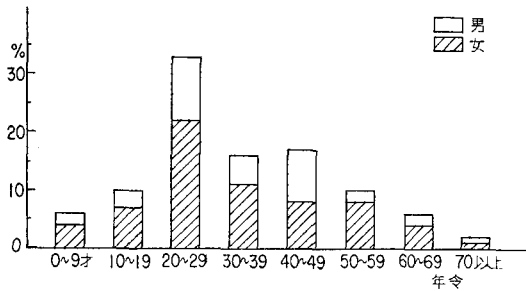


図2 炎症

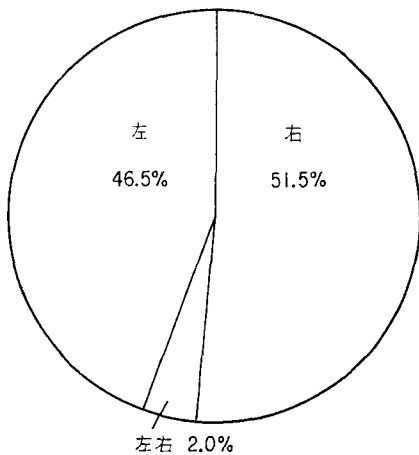


図3 上顎洞炎

であった。

また歯性上顎洞炎は症例数も多く本学口腔外科の主要な研究テーマでもあったことから別項に検討してみた。

罹患部は99例中、右側51例 (51.5%)、左側46例

(46.5%) とやや右側が多く、又左右両側が2例 (2.0%) であった (図3)。

男女別では、男性38例 (38.4%)、女性61例 (61.6%) と圧倒的に女性が多かった。年齢は20代が43例 (43.3%) と約半数を占め、次に40代が20例 (20.2%)、30代14例 (14.1%) で20代から40代がほとんどであった (図4)。

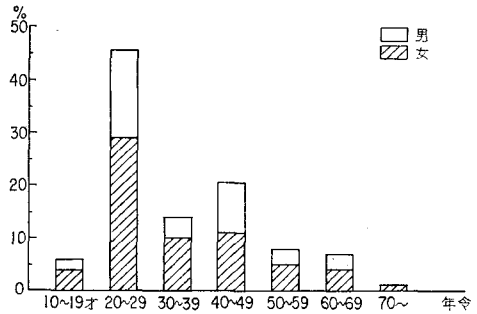


図4 上顎洞炎

2) 外傷

外傷107例中顎骨々折が94例 (87.9%) を占め、そのうち上顎骨々折、下顎骨々折、上下顎骨々折に分類すると下顎骨々折が最も多く48例 (51.1%)、上顎骨々折24例 (25.5%)、上下顎骨々折10例

表4 外傷

部位	人数	%	
顎骨骨折	上顎骨	24	87.9
	下顎骨	48	
	上下顎骨	10	
	頬骨 鼻骨	6	
軟組織損傷	12	11.2	
歯牙破折	1	0.9	
計	107	100.0	

(10.5%)、頬骨鼻骨々折各6例 (6.5%) であった。これらの大部分は2カ所以上の骨折であり、下顎では正中および犬歯部に好発し、次いで下顎隅角部、関節突起であった。軟組織の損傷12例 (11.2%) には、交通事故による裂傷、乳幼児の転倒による口唇裂傷がその大半であった

(表4).

年齢では20代が圧倒的に多く、38例(35.5%)、次に10代、30代がほぼ同数でそれぞれ17%であり、10才未満と40代が同数の13例(12.1%)で10才未満の70%は軟組織損傷であつた。50代以降は急激に減少し、女性は1例もなかつた(図5)。

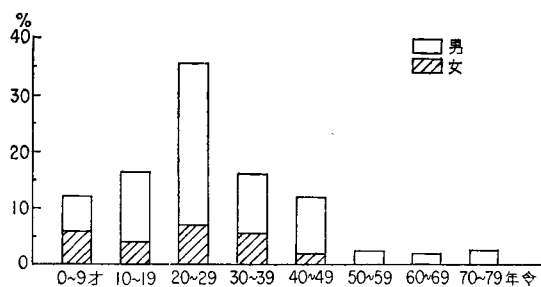


図5 外傷

3) 腫瘍

良性腫瘍が39例(44.9%)、悪性腫瘍が48例(55.1%)で、悪性腫瘍がやや多く、良性腫瘍のうちで歯原性のものにエナメル上皮腫の10例(11.4%)、歯牙腫6例(6.8%)があり、非歯原性では血管腫10例(11.4%)、骨腫4例(4.5%)、骨線維腫2例、腺腫2例、脂肪腫2例等があつた。歯系と非歯系の割合は3:5で非歯系のものが多かつた。また悪性腫瘍では癌腫32例(36.5%)、肉腫16例(18.1%)で、癌腫が圧倒的に多く、癌腫と肉腫の割合は2:1であつた。部位別では癌腫のうち上顎に発生するものが最も多く、次いで舌、下顎の順であり、肉腫では顎下部から頸部にかけてのものが多く、次いで上顎、下顎に原発したものがみられた(表5)。

年代別では、良性の20代が最も多く12例(30.8%)で、次に10代の8例(20.5%)、50代、60代の5例(12.8%)等であつた(図6)。

性別では、20代、30代、50代では圧倒的に女性が多かつた。

悪性腫瘍では50代が最も多く15例(31.3%)、次に60代8例(16.7%)、70才以上6例(12.5%)、30代、40代が4例(8.3%)あり、20才未満はみられず、性別では男性に多かつた(図7)。良性腫瘍

表5 腫瘍

悪性腫瘍	癌	上顎癌	14例	16.0%
		下顎癌	8	9.1
		舌癌	9	10.3
		口腔底癌	1	1.1
肉腫	上顎部	4	4.5	
	下顎部	4	4.5	
	頸部	8	9.1	
良性的腫瘍	歯原性	エナメル上皮腫	10	11.4
		歯牙腫	6	6.8
非歯原性	血管腫	10	11.4	
	骨線維腫	2	2.2	
	骨腫	4	4.5	
	腺腫	2	2.2	
	内皮腫	1	1.1	
	脂肪腫	2	2.2	
	乳頭腫	1	1.1	
	好酸球肉芽腫	1	1.1	

計 87 100.0%

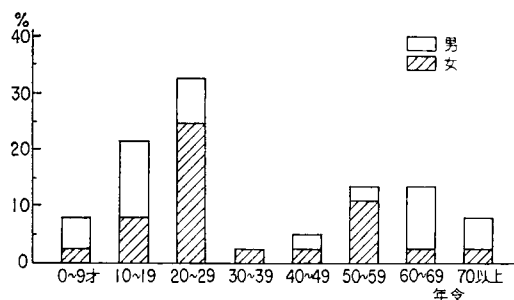


図6 良性腫瘍

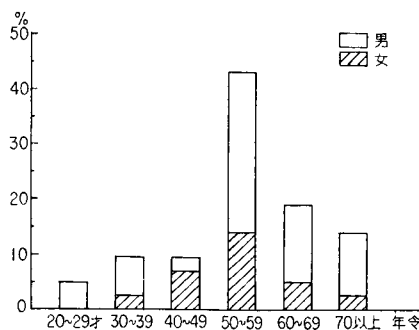


図7 悪性腫瘍

は若年者に、悪性腫瘍は壮年、老年に多くみられた。

4) 嚢胞

84例中、歯系嚢胞が40例(47.6%)、非歯系嚢胞が44例(52.4%)で、歯系嚢胞のうち、歯根嚢胞が27例(32.2%)でその大部分を占め、濾胞性歯嚢胞13例(15.4%)であった。非歯系嚢胞では、術後性頬部嚢胞が多く19例(22.6%)、上顎正中嚢胞8例(9.5%)、カマ腫5例(5.9%)等となっている。その他として潜在性骨嚢胞、血液滲出嚢胞等があった。また、顎骨内に形成された嚢胞は84例中72例(85.7%)であった(表6)。

表6 嚢胞

歯系嚢胞		非歯系嚢胞	
診 断	例数%	診 断	例数%
歯根嚢胞	27 (32.2)	術後性頬部嚢胞	19 (22.6)
濾胞性歯嚢胞	13 (15.4)	上顎正中嚢胞	8 (9.5)
		鼻口蓋管嚢胞	4 (4.7)
		カマ腫	5 (5.9)
		粘液嚢胞	3 (3.5)
		類皮線嚢胞	2 (2.3)
		その他	5 (5.9)
	40 (47.6)		44 (52.4)

年齢では20代が最も多く20例(23.8%)で、次いで50代が17例(20.2%)、40代13例(15.5%)、10代、30代が12例(14.3%)等であった。各年代とも男性より女性の方が多く、10代から50才まで幅広くみられた。

5) 奇形

奇形は651例中56例(8.6%)であった。そのうち裂奇形が47例(84%)と大部分を占め、裂奇形の中でも口蓋裂が最も多く28例、唇裂10例、唇顎口蓋裂9例であった。その他として小帯異常8例、巨舌症1例であった(表7)。性別では、

表7 奇形

	診 断	例 数	%
裂奇形	唇 裂	10	17.9
	口 蓋 裂	28	50.0
	唇 顎 口 蓋 裂	9	16.1
その他	小 帯 異 常	8	14.3
	巨 舌 症	1	1.7
計		56	100.0

男女同数の28例ずつで、年齢別では1~2才19例(33.9%)で最も多く、次いで1才未満の9例(16.1%)、3~4才8例(14.3%)、5~6才7例(12.5%)の順で6才未満が76.8%と大部分を占めていた。また30才以上の者2例もあった。

6) 萌出異常

12例中全例が埋伏症で、そのうち2例(16.7%)が過剰埋伏歯であった。埋伏している部位は、上顎智歯3例、下顎智歯5例、上顎前歯2例で、過剰埋伏は2例とも上顎最後臼歯部であった。

7) 齶歯

小児において多数齶歯があり、外来治療に対し非協力的なため入院し、全身麻酔にて治療を要したものの9例(50%)、脳性麻痺3例(16.1%)、また全身性疾患として心疾患のあるもの4例(22.2%)などの計18例があった。

年齢では0~5才が11例(61.6%)と多く5~10才3例(16.6%)であった。

8) その他

表8 その他

診 断	例 数	%
後 出 血	16	32
歯 周 疾 患	10	20
唾 石	7	14
抜 歯 後 感 染	3	6
歯 槽 骨 隆 起	3	6
不 明	5	10
そ の 他	6	12
計	50例	100%

その他として術後出血16例(32%),歯周疾患10例(20%),唾石7例(14%)などの計50例であった(表8)。

術後出血のため、出血性素因が疑われた15例のうち、ならん全身的疾患なく抜歯後出血したものが6例(40%)で、血液疾患による歯肉からの出血や抜歯窩からの出血が9例(60%)であった。

4. 考 察

医科大学付属病院に所属する口腔外科入院患者の症例分析の発表は少ない。口腔外科における入院患者は手術侵襲が大きく、外来では手術が困難なもの、また全身的疾患を有するため、術前、術中、術後の全身的管理を要するもの、また外傷などの緊急を要する疾患などである。わたくしたちは昭和43年1月から昭和47年12月までの最近5年間に、本学口腔外科に入院を要した651名について分析を行なった。

5年間の口腔外科外来を訪ずれた新患総数は17,713名で、入院を要したものはその3.7%であった。年度別推移では45年が最も多く149名で、最も少ないのは43年の122名で、平均130名前後であった。性別では男性48.8%、女性51.2%とわずかに女性が多かった。年令では20代が最も多く26%、10才未満から50代までは10~15%前後で、60才から5%以下と次第に少なくなっている。最高年令は癌腫の84才で、最小年令は裂奇形の生後2カ月であった。

臨床診断別では炎症が最も多く、209例(32.1%)、上顎洞炎は炎症ではあるが、当教室の主要研究テーマであったことから別項に抜粋したが、炎症のうち209例中99例(47.3%)であった。次いで外傷107例(16.4%)、腫瘍87例(13.3%)、嚢胞84例(12.9%)、奇形56例(8.6%)などの順であった。これは藤岡ら²⁾の報告と比べると上位の疾患は順序は異なるもほぼ同率であるが、やや外傷が多いように思われる。また地方都市における関山³⁾らの報告では奇形が最も多く33.1%、次いで変型症18.1%、嚢胞8.7%などで炎症が少なく7.3%、さらに外傷などは5.6%と低く、わたくしたちの成績と比較した都市においても症例の高

低率に大きな差があり、地域における、大学病院の特性がうかがわれる。

症例別に分析してみると、頻度の多かつた炎症209例(32.1%)のうち、上顎洞炎47.3%、顎骨々膜炎が26.3%で、次いで骨膜炎7.2%、蜂窩織炎4.8%などであり、また放線菌症の3例があった。これらは全身管理の必要な重篤例で20代が最も多いほか、全年令層にわたっていた。性別では男性35%、女性65%と女性に多く認められ、入院期間は14日以内がほとんどで、75.5%を占め、平均入院日数は12日間であった。長期にわたつたものは放線菌症や骨髄炎の腐骨除去術などを行なった症例があった。

また炎症の中で上顎洞炎をみると99例(47.3%)を占め、他報告に比べ非常に多い症例である。年令では20代に頻度が高く、次いで40代、30代となつている。これは15~20才頃上顎洞の発育が完成すること、20~39歳頃に上顎洞炎、上顎歯牙疾患などが最も生じやすいためではないかと考えられるが、本学口腔外科外来患者は老人が比較的少なく、青年層および壮年層が多い点も原因となつていると思われる。性別では男性38.4%、女性61.6%と圧倒的に女性が多く、各年代とも女性が多かつた。左右別では左側が46.5%、右側51.5%とやや右側に多く、原因歯は左、右側とも第一大臼歯、第二大臼歯、第一小臼歯の順であった。これは症例として抜歯時にあやまつて歯根が洞内に迷入し、上顎洞炎を誘発し、紹介された患者も相当数あり、上顎臼歯部の抜歯に際し、必ずX線写真にて上顎洞と歯牙との関係を確認してから抜歯を行うべきと思われる。

外傷は107例(16.4%)で、その87.9%は顎骨骨折で、男性が76.6%を占めていた。年令では20代が圧倒的に多く35.5%で、次いで10代、30代であった。これらは近年交通量の増加、レジャースポーツの普及、労働災害などにより顎顔面外傷が多く発生しやすい状況下であり、原因をみてもほとんどが交通事故によるもので、他に労働災害、スポーツ、また地域柄ケンカなどが多い。また10才未満も12.1%と多く、これらは転倒や交通事故

による顎骨々折や軟組織損傷によるものである。これらのほとんどは受傷後直ちに救急車で本院救急センターに運ばれた新鮮症例であるが、脳外科的、また他部の骨折や内臓異常併発により他科に一時入院し、1～2週間後に当科に転科してくる例も多い。医科大学に所属する口腔外科の存在意義が重要視され、外傷患者が入院すれば関係各科が集まり、まず何をどうすべきかを討論し、最善策を立て処置に当たっていることは総合病院の利点であろう。

腫瘍87例13.3%で、そのうち良性腫瘍44.9%、悪性腫瘍55.1%で、悪性のやや多かつた。良性腫瘍ではエナメル上皮腫10例、血管腫10例が多く、他に好酸筋肉芽腫の1例が見られ、悪性では上顎癌14例、舌癌9例などであつた。年令的にみると良性では20代が最も多く、悪性では50代が大半を占め、次いで60代、70代と老年で、男性に多かつた。

嚢胞84例(12.9%)中、歯系嚢胞が47.6%、非歯系嚢胞52.4%を占めており、各年代とも女性にやや多かつた。

奇形56例 8.6%で、そのうち84例が裂奇形であつた。1～2才が33.9%と最も多く、次いで1才未満で、ほとんどが6才未満であつた。1～6才が大半を占めたのは口蓋裂が裂奇形の $\frac{1}{2}$ を占めたからである。また20代2例、30代2例がある。これら4例は唇裂のみを手術し、口蓋裂を放置してあつたもので、このうち2例は沖縄からの患者であつた。変形症の5例は下顎前突症で、Kostečka氏法あるいは下顎骨々体離断などによる咬合回復手術を行なつたものである。

その他に後出血16例、抜歯後感染3例などがあるが、これらは全身管理を必要としたものであり、また歯周疾患10例は全身管理のもとに抜歯や手術を要した症例である。

本報告の結果を他病院の口腔外科入院患者と比較してみると、三重県立医大口腔外科⁴⁾では、10年間(昭和27年～昭和36年)に323例の入院患者で、炎症38.4%、悪性腫瘍1.8%。神戸医大口腔外科⁵⁾は3年間(昭和36年～昭和39年)に219例

で、腫瘍37.4%、炎症21.4%、外傷17.9%。東歯大⁶⁾の8年間(昭和32年～昭和40年)に2,565名で腫瘍26.3%、炎症、嚢胞がそれぞれ19.2%。東京医歯大口腔外科⁷⁾1966年度1年間のものでは654症例あり、奇形33.1%、変形症18.1%と大半を占め、腫瘍15.2%、嚢胞8.7%、炎症7.3%、外傷5.6%である。岩手医科大学歯学部口外¹⁾の5年間(昭和40年～昭和45年)では、炎症22.9%、奇形20.7%、腫瘍16.6%、嚢胞15.7%、外傷13.1%の順であつたと述べている。

他病院ではほとんどが炎症か腫瘍が第1位を占め、外傷は下位である。また東京医歯大などは都内でありながらも本学との地域的な違いで症例的にも異なつて、外傷が非常に少ないことは興味深いものである。これは医科大学における口腔外科の、また地域的な特徴が症例に現われているものと思われる。

5. 結 論

東京女子医科大学付属病院口腔外科に昭和43年～昭和47年までの5年間に入院した患者651例について症例分析を行なつた。年間平均130症例で男性48.8%、女性51.2%であつた。

臨床診断別分類では、炎症209例32.1%、外傷87例13.3%、嚢胞84例12.9%、奇形56例8.6%の順であつた。入院期間は最短の者は炎症の1日、最長の者は腫瘍の127日で、主な疾患の入院日数は、炎症13日、腫瘍29日、嚢胞13日、奇形21日、外傷32日、歯性上顎洞炎17日であつた。他の病院と比べて外傷と歯性上顎洞炎の頻度が高かつたことは注目すべきことであつた。

稿を終るにあたり、終始ご懇切なご指導とご校閲をいただいた河西一秀教授に深甚の謝意を表します。

(本論文の要旨は昭和48年6月東京女子医科大学々会第184回例会にて発表した)

文 献

- 1) 藤岡幸雄・他：岩手医科大学歯学部口腔外科創設後5年間における入院患者の臨床統計的観察。口科誌 20 592 (1971)
- 2) 関山三郎・他：1966年1年間における歯科病棟口腔外科入院患者654例の症例分析。口科誌

- 17 578 (1968)
- 3) 河合 幹：上顎洞炎と歯牙との関係に関する研究。口外誌 4 2 (1958)
- 4) 横山靖夫・他：三重県立大学医学部附属病院口腔外科の最近10年間における入院患者について。口科誌 12 127 (1963)
- 5) 伊集院淳一・他：最近3年間の入院患者の臨床統計的観察。口科誌 14 76 (1965)
- 6) 高北義彦・他：最近8年間の入院患者の臨床統計的観察。歯科学報 65 487 (1965)
-